名誉会員　創立 60 周年記念寄稿

60 年誌発刊をお祝いして

名誉会員　板橋　保

このたび、創立 60 周年を迎えられて記念誌を発刊されますことを心よりお慶び申し上げます。当時 150 名にも満たない有志が設立した技師会も先輩達の並々ならぬ努力によって、現在では 1300 名を越える技師会に成長し発展していることは、このうえない喜びであります。会員の皆さんが放射線技師職の確立と技師会発展の為に努力してきた成果だと思います。これからは組織発展のために「技師会は何をしてくれるか」ではなく「あなたは技師会のために何ができるか」を考え行動して下さい。申し上げるまでもなく。近代医療は国民の高齢化が急速に進むなかで限りなく高度化し大きな変革が求められています。特に患者中心の医療が要求され質の高い医療技術の提供が求められています。また医療の高度化、細分化が進む程各職種間のチーム医療が重要になってまいります。皆さんは新しい時代の医療人として今後飛躍するために、更に認識を深め社会から信頼される診療放射線技師として、国民医療の向上と発展に貢献できるよう頑張って下さい。赤十字放射線技師会はチーム医療推進のため、職制委員会を作り組織改革に取り組んできましたが、いまだに実現していない事を残念に思います。全国の病院で「放射科部」と云う組織は赤十字だけです、日本赤十字社の考えだけで現状を続けるのではなく、組織の在り方を検討すべきだと思います。私は今年喜寿を迎えることができました、しかし 3 月 11 日東日本大震災では未曾有の被害をもたらし、福島原発事故では放射能汚染のため多くの人たちがいまだに郷里に帰ることのできない現状を思うと胸の痛む毎日です。また地球温暖化が豪雨災害や大型台風の原因ではないかとも云われています。私達は未来の子供達のために、いま何ができるか真剣に考えなければなりません。私の座右の銘「温故知新」古きを訪ね新しきを知る、この言葉を今一度深く噛み締め更に新しい歴史を作るよう頑張ってください。

最後に本会のますますの発展を期待しお祝いの言葉といたします。

60 周年の刊行に寄せて

名誉会員　横山幸夫

創立以来変遷する時代を克服し、ここに 60 周年を迎え、記念誌が刊行されますことをお慶び申し上げます。

創立当時(昭和 28 年)120 余名の会員数が今では 1300 余名とのこと感無量です。

これもひとえに会長はじめ会員皆様方の努力の賜物と思います。

私は、常々診療放射線技師は、真面目な職業人の団体と思います。時代と共に、仕事内容も変化発展し、想像の付かない分野を勉強し、研究し短時間の間に身に付け、寝食を惜しんで没頭した。

医療分野の発展に追い付け、追い越せと、日々生活をした職種だと自負しています。

激動期・軌道期・形成期・壮年期とも表現されますが、私は、形成期・壮年期はこれからと思っています。

医療技術の進展に伴い、放射線業務も、細分化し、煩雑化し、高度化し、教育なくしてはと、卒後再教育し、臨床実習し、教育システムも、専修学校・医療短大・4 年制大学、大学院も設置され発展してきました。

日本赤十字社放射線技師会も 60 周年を迎え、年度特別講演も内容重厚な講演を年 2〜3 例を 60 回、何よりも素晴らし会員研究発表の数と内容の重厚豊富さは、尊い成績と会発展に寄与した証と、会に籍を置いた者としての誇りと自負する次第です。これも現役の会員のご努力と感謝する次第です。

今年も、新たな年を迎え反省するに・・・昨年は、漢字のグランプリは「輪」でした。

2020 年に東京オリンピック決定、富士山世界遺産登録等、日本中が輪になって湧いた年でした。他方政治経済の面では、成り行き不透明なアベノミクスの動向、貧富格差の増長、超高齢社会への突入、汚染水や廃棄物等原発事故処理の問題などが山積したまま新年を迎えることになりました。きっとこれからは、穏やかな年が来ることを念じる次第です。

最後に、日本赤十字社放射線技師会の益々の発展と活躍を祈念して、創立 60 周年のお祝いの挨拶とします。

60 周年記念に寄せて

名誉会員　　星野保郎

日本赤十字社診療放射線技師会創立６０周年おめでとうございます。

私が足利赤十字病院に入職したのが丁度５０年前１９６３年でした。現在赤十字病院に勤務している放射線技師の７割くらいの方はまだ生まれていなかったでしょう、当時の赤十字本社は木造２階建て建設時期は覚えていませんが現在残っていれば国の重要文化財に指定されるような重厚な建物でした。１９６３年はアジアで初めてのオリンピックが開催されるため、数年前から東京に限らず日本中建築ラッシュで活気に溢れていました。東海道新幹線、東名高速道路、首都高速道路等、オリンピック開催に間に合うよう突貫工事で建設されていたことをよく覚えています。

私は入職と同時に赤十字社診療放射線技師会（当時はエックス線技師会）設立発起人である、上司の故瀬山吉久名誉会員に勧められ入会しましたが、当時の会員数は５００人に満たなかったと思います。年一回の研修会は会設立時から脈々と引き継がれ、現在も活発に開催されている事は発起人の方々の喜びであり会員の恩返しでもあると思います。

現在の若い会員には死語となっていると思いますが、タングステン酸の増感紙、タンク現像の時代に入職し何年か後に希土類感材、自動現像機の出現に目を見張って放射線技師も暗室作業が半分以下になったと喜んでいましたが、１９７５年イギリスのレコードメーカーがコンピュータトモグラフィーを開発したとの発表に、医学会全体が吃驚しました。当時としては超高額機器の為、総合病院とは言え地方の足利日赤には当分入らない高根の花と思ってみておりましたが、医師からの要望が強く数年後には足利日赤にも導入され診療に革命を起こしました。この頃からエックス線写真にもデジタル化が進み、ＣＲ画像の目覚ましい進歩、デジタル化が遅れていた透視部門にもフラットパネルの開発により一気にデジタル化が進んだもの思います。記憶媒体の開発はパソコンでも分かりますが、１０数年でメガバイトからギガ、テラバイトまで開発が進み医療関係も十分な恩恵を受けています。今では大病院から地方の診療所までモニター診断が主流となっていますが、モニターを前で画像を見ている放射線技師の姿を見ると、５０年前の放射線技師と現在の放射線技師では撮影のスイッチを押す以外は別の職種と思うほどに変化しています。日毎に進歩している医療機器に遅れることなく診療に貢献している若い技師を目の前にすると隔世の感が除けません。

院内勉強会、地域勉強会、赤十字放射線技師研修会、赤十字医学会、等研修の場は充分にあると思います。今後益々進歩するであろう医療界で切磋琢磨し、病院における診療放射線技師の存在を益々高めて頂きたいと思います。

６０周年記念号のお祝いの言葉とは成らず、老会員の思い出話になってしまいましたが、日本赤十字診療放射線技師会の益々の発展、及び会員諸氏の健勝を祈願しお祝いの言葉といたします。

60 周年記念寄稿

日本赤十字社医療センター
医療技術部放射線課　常勤嘱託
名誉会員　鈴木利男

日本赤十字社診療放射線技師会、創立 60 周年おめでとうございます。
昭和26年技師法が制定され、その2年後の昭和28年には本赤十字技師会を発足させた先輩諸兄の熱意と決断には只々敬服する次第であります。

また、会員数も1300余名となり、日本を代表する職域団体と成長･発展できたことは、赤十字病院が国民に信頼されている証でもあります。その職場に従事する技師も、赤十字を愛し、放射線業務が好きで医療の向上に寄与しているという満足感を持っているからだと信じます。

私は平成24年3月に医療センターを定年退職して、現在再雇用制度により常勤嘱託として勤務しています。診療放射線技師としての40年間、常々心の糧としてきた他院勤務先輩技師（小林輝雄氏）の言葉を一部抜粋してご紹介したいと思います。
それは、『どのような職業でもその仕事に携わる人の適正というものがある。先ずその仕事が好きということでその仕事に興味をもつとか格好がいいとか、自分に合っているという理由などで自分自身で決めることができるが、次にその仕事を遂行する能力をもっているということは、社会環境や対象者の要望に応じて発展する職業に対応する能力を維持することで、これは研修などの生涯教育という自分自身に課せられる**掟**である。仕事の内容を他人が認めるということは、その仕事を行っている人の姿、つまり言葉や行動は**心**から発するという**心**が主体となる**人格**そのものが評価の対象となる。従ってより高い評価を受けるためには、自ら常にいつでも取り出せる応用できる能力を**心**に整理しておかなければならないし、仕事がより好きになり、仕事を愛せるようになれば自分に不足していることを学ばなければならない。その努力がまたよい評価につながるが、評価というものは、自分が求めて得られるものではなく、相手が受ける価値観によって決まるということも忘れてはならない。』という彼の言葉の一部抜粋です。
『**心・人格・掟**』などチョット古いよと言われそうですが、それが不思議と歳を重ねてくると「そうだよなぁ」と納得してしまいます。知人の言葉でしたが、皆様の**心**の片隅に置いていただけると幸いです。

最後に、貴会の益々の発展を祈念して、創立60周年のお祝いの言葉とします。

平成 25 年日本赤十字放射線技師学術総会開催報告

日本赤十字社診療放射線技師会
学術担当理事　安彦　茂

平成 25 年日本赤十字放射線技師学術総会が平成 25 年 6 月 6 日・7 日の 2 日間、東京国際フォーラム D5 で開催されました。今回は、北海道や沖縄などの全国の施設から 126 名の会員に出席して頂き、盛会のうちに終了いたしました。

本社講演を、日本赤十字社　事業局　医療事業部　医療課課長　猪狩　浩佳様にしていただきました。

医療情報分科会のシンポジウムが開催されました。また、臨床画像を実際にモニタの実機を使って展示していただきました。

教育講演は、「職場におけるコミュニケーションの重要性について」（株）プラネットファイブ　代表取締役　田中　和彦　先生に、楽しいグループワークを交えたお話をしていただきました。

ＣＴ分科会講演「ＣＴの被ばく低減を考える」を京都第二赤十字病院 河本 勲則 先生にしていただきました。

研究発表は 13 題あり、最優秀発表賞に、「透析サポートチームでの放射線技師の役割」　庄原赤十字病院　安井　哲士様が選ばれました。また、優秀発表賞は、深谷赤十字病院　成田 麻美様，伊勢赤十字病院　山中　敬之様，広島赤十字・原爆病院　湯門　慎治様の 3 名が選ばれました。